1963年以来，海外調査を行うことが出来たのも社長の了解の許に重役の三宅馨博士が決定されたからである。斯様に有能な多くの重役を傘下に集めることが出来たのも武田氏の人を見る明と徳があったからであろう。昭和46年に創業190周年を記念して薬用植物画譜という豪華な書物が出版された。氏が尊敬した刈米達夫博士と氏の友人小磯良平画伯が協力してつくり上げたもので，仲々美術画の画材になし難いブクリョウやマクリなども美しい姿で画かれている。昨今日本では薬業界に対する風当りが強く，また春には将来を嘱望して居られた御長男を失い，それらの心労が死期を早めたのかも知れない。武田薬品創立200年を目の前にしての不幸であった。ここに謹しんで御冥福を祈る次第である。

○高等植物分布資料　Material for the distribution of vascular plants in Japan.

102　ヒメチゴザサ *Cyrtococcum patens* A. Camus 小笠原諸島の植物について調査研究されて居られる林業試験場の豊田武司氏から，同氏が昭和54年1月2日，父島の初寝山から中央山の間で採集された，イネ科植物の同定を依頼された。

初寝山附近は一般に昔から住居のなかった地域であり，小川および湿地を含む低い地域と共に本来の植生が殆んど破壊を免がれて残っている植物の宝庫だと言われている。ミクロネシア・琉球・台湾・中国大陸およびフィリッピンの標本と比較して旧熱帯に広く分布する *Cyrtococcum patens* ヒメチゴザサであることが分った。余り乾燥がひどくない森林の下草として群生しているが，穂がおもに秋冬にかけて出るためか今迄報告されていない。小笠原の植物は硫黄列島・ミクロネシア・琉球・台湾・フィリッピンのフロラと関係が深く，ヒメチゴザサもこれらの地域に共通して分布する種類の一つである。

ヒメチゴザサは小穂が紫褐色でやや小さく，葉鞘の長さはほとんどが 2 cm 内外で，花序の分枝は長いがやや上向きに小数の小穂がつき，葉は小さいので，ヒロハヒメチゴザサ *C. accrescens* Stapf や，ミクロネシア・中国南部・フィリッピン・マレーシヤ・タイ・ビルマ・インド等に分布して小穂柄の短い *C. oxyphyllum* Stapf と区別できる。水牛が食べているのを台湾で見かけたことがある。この標本の発見で小笠原の植物相に新しい記録として属のレベルでヒメチゴザサ属 *Cyrtococcum* が加えられることになる。

（玉川大学，許　建昌）

□生物学御研究所：**伊豆須崎の植物** (Flora Suzakiensis) 266 pp. 64 pls. 1980. 保育社，大阪. ¥6,000. 陛下の伊豆須崎御用邸を中心としたフロラである。那須に次ぐフロラで，大体それと同じ体裁になっている。この須崎は南伊豆で高知の足摺岬に似た点が多いし，またウイリアムズとモロウとが日本ではじめて採集した下田に近く，昭和50年御訪米の際にタイプの標本類を親しく調査されたと記しておられる。

地質や気象，沿革，植生，分布上の特徴，研究史上注目すべき種類（イズアサツキ，イズドコロ，シモダカンアオイ，ソナレセンブリ）については和英両文で記されている。

写真は中々鮮明でよく特徴がでている。エノキの果実が球形で日本産は中国産よりやや長いとしたが区別しない方が適当であるとしたり，アシタバの葉の切口からはレモン色の液がでて，それはハマウドの薄いクリーム色と異なるなど，中々細かく鋭く見ておられる。　(前川文夫)

○ミヤマキリシマの受粉生態実験（山口　聡）Satoshi YAMAGUCHI: Pollination experiment in *Rhododendron kiusianum* Makino

ヤマツツジ節内では自然種間の雑種育成の報告例は多い。しかし，実際に野外での種間の交雑程度や関連する受粉生態について観察した例は，筆者の知る限りでは皆無である。そこで，野外でのツツジ類のこれらに関する実態を知るための第一歩として，園地に植栽されたミヤマキリシマを用いて，簡便な受粉試験を試みた。

材料及び方法　野菜試久留米支場内のミヤマキリシマ園地に生育する1個体（株張り直径 1 m）を供試した。この個体は，園地（約 20 m^2）のほぼ中央附近に位置しているため，ミヤマキリシマ以外のツツジ属の花粉の影響は受けないものと認められた。実験に当っては，放任受粉と，人工受粉の自殖と他殖の計3区に分ち，更に各区を花弁及び雄ずいの両方または一方の除去，あるいは非除去の4通りの処理を行ない，全体として12通りの処理を行なった。おのおのの処理区については，平均20花を対象として，結果率及び平均種子数などを調査した。

結果及び考察　強制他殖区においては，花弁のみ除去（33%），花弁，雄ずい除去（76%），雄ずいのみ除去（56%），両者とも非除去（66%），の4処理区のいずれでも結果は良好であった（表1，1～4）。結果率は（　）中に示したとおりである。平均種子数も結果果当り26から72までの値を示した。強制他殖区全体を平均すると，結果率58%，結果果当りの種子数49であった。一般に，ミヤマキリシマでは，十分な量の花粉が供給された場合の種子数は，平均 140（山口，未発表）である。本実験では，受粉量が少なめであったことが他殖区の種子数が少なかった理由と考えられる。なお，花弁あるいは雄ずいを除去した際に，雌性器官に機能的な傷害を与えなかったことが結朔状況から判断できる。

強制自殖区においては，花弁，雄ずいの存否にかかわらず，平均して53%の結果率を示した（表1，5～3）。しかし，結果果当りの種子数は著しく減少し，平均7.7であった。従来から重視されている結果率から見る限りでは，自殖，他殖いずれも大きな差はないが，平均種子数を考慮すれば，本種が自家不和合性の傾向があると判断してよいであろう。しかし，厳密に自家不和合性を確認するためには，受粉操作時に花粉量を調節し，一方，受粉可能な胚珠数を確認あるいは調節しておくことが必要と考えられる。オンツツジ，ゲンカイツツジ，サクラツツジ，ツクシシャクナゲでは，自殖時の結果率は，最近3年間を通じて0%であったことを考えると，ミヤマキリシマの自家不和合性は，やや弱いものであると判断できる。